

史はそれにくわしい人にまかせることをしなかつた企画に問題があるのだろう。同様におおきな(ときには滑稽ともいへば)誤りは、もつと年下の人のものにもみられる。

こういう人選をみるにつけ、金沢学会で理事会不信任というはげしい改革手段さえとつた日本精神神経学会が、「長老・高位者」偏重という(同時に、歴史研究の独自性をみとめず、学問よりは儀式・お祭りを重視する)風潮をすてていないことがはつきりみてとれる。

これらのほかに目だつのは、重要な人名の誤記である。理事長挨拶では、社団法人になって最初の理事長である内村祐之を裕之としている。

編集委員会では五ページの正誤表をつくつたが、そこには「記事の誤り」との指摘が三回でている。こまかく点検していけば、単なる誤植でなくて「記事の誤り」とするべき箇所がほかにもみつかるともいれない。

このように、この記念誌の欠点をあげつらつてはみたが、波瀾にとんだ学会の一〇〇年の歩みをみるに不可欠の資料であることは、もちろんである。しかも、その波瀾は世の動きにつれてわきあがつたものであつて、この一〇〇年史は日本社会史の一断面ともなつてゐる。残念ながら、日本精神神経学会会員に歴史への関心はうすく、購読者は会員数の数パーセントにとどまつてゐる。

なにしろ大冊である。読者はまず、概説にあたる「沿革―日本精神神経学会の歴史―」をよみ、ついで座談会「学会の

一〇〇年、そしてこれから」をよみ、あとは関心ある部分にすまれるのがよいだろう。一五編からなる「トピックス」の部分にもおもしろい記事がある。岡田・小峯が第一〇三回日本医史学会で発表した「製本おそるべし―『神経学雑誌』のばあい―」も、「トピックス」におさめられている。

なお、日本医史学会会員では、小峯和茂、昼田源四郎、松下正明および岡田が、この編集委員として参加していた。また、今回はじめてあきらかにされた重要事実のいくつかは、小峰研究所に蔵されていた未製本の『神経学雑誌』によるものであつた(この点は、岡田・小峯が「製本おそるべし」にのべた)。

(岡田 靖雄)

〔日本精神神経学会、東京都文京区本郷五―二五―一八ハイテク本郷ビル内、電話〇三―三三八一―二九九一、二〇〇三年五月一日、B五判、本編八九二頁、資料編三六八頁＋CD-ROM一枚、送料とも一五、〇〇〇円〕

吉元 昭治 著

### 『日本全国神話伝説道指南』

本書は口絵に評者も関心をもつて収集している全国の多くの絵馬がカラーで七頁も載せられ、多くの写真・図版と共に神話伝説、歴史、民俗学、医史学と広範囲にわたる豊富な内容が伝承地という視点から記された総五六〇頁の大著であ

る。

この書は膨大な量の資料を集めただけでなく、長い年月をかけ北は北海道から南は沖縄まで多くの伝承地に足をはこばれ、それも所によつては五回も実地調査のうえ上梓されたもので、よくもこれだけの資料と調査を整理されたものだと感嘆にたえない。

南方熊楠、柳田国男の全集が刊行された民俗学はなやかなりし、昭和四〇年代後半から五〇年代初頭にかけて各県の民間信仰、民間療法、歳事習俗のシリーズが発行され、全国の些細な民間医療信仰・習俗まで紹介されたが、以降、民俗学の衰退もあり、一人の著者による全国規模での一冊に収めた本書のような神話伝説の伝承地紹介の良書を評者は寡聞にして知らない。交通機関の発達により伝承地を訪れるのも便利になったとは言え、調査に費やされた時間、文献・資料収集、整理と執筆を思うと著者に頭がさがる。

著者が集められた文献・資料は小さなパンフレットを含め膨大なものだが、これ等の文献・資料を第一部日本の神話、歴史伝承、第二・三・四部日本と中国・朝鮮との神々の関係、第五・六・八・九部昔話、民間信仰、第七部仏教思想伝来と項目順に理路整然とわかりやすく簡潔にまとめられており、学問分野も多岐にわたっている。このような著書は分野が余りにも広範囲であるため内容はともすれば伝承地の紹介・案内書的な資料の羅列にすぎないきらいになるが、この書は的確な要約、博引旁証と現地を实地に歩いた文と写真が絶妙に

絡みあい、評者が愛読する司馬遼太郎の膨大な「街道をゆく」シリーズを一冊にしたようで、読者をあきさせない。神話伝説と伝承地の多くの写真・図版と記述は、批判のつけようもない。とは言え、評者は特に菌類学史に関心を持つものであり、第九部「その他の伝承」にある靈芝の項目についてのみ、僭越であるが少し訂正させていただきたい。無論この訂正が本書の価値をいささかも減じるものでないことは断つておく。

マンネンダケはすでに古名であり現在ではマンネンタケと称されている。また靈芝を中国での漢方医学また古来の分類では菌類の色の違いにより赤芝、紫芝などと称していたが、現在中国真菌類の分類では学名 *Conoderma lactinum* (中国名 靈芝・和名マンネンタケ)、学名 *Gonderna japonicum* (中国名 紫芝・和名マゴジャクシ) と命名しておりもはや色の違いでは菌類学上分類されていない。また『日本書紀』皇極天皇三年(六四四)に載る菌の話は、その発生時期・発生量から評者はこの菌を *Collybia nelipis* (和名エノキタケ) と同定し、芝草(靈芝)についての記述は天武七年(六七八)二月二日の条が初出と考える。

少し余分な話ではあるが、石敢當について著者はその由来を手際よく紹介され、文献にない地を写真とともに紹介されている。評者も京都で表札の下に置かれた石敢當を見て、家の持ち主にたずねた所、沖縄県出身者であった事、不動産屋がこれを置いておくと土地の価格が下がるから取り外すよう

に言われたとの笑い話を聞いたことがあり、本土では多くの人々がすでに忘れはじめている風習・伝承を採録されていることに昔の記憶がよみがえるとともに、忘れられつつある石敢當のような風習の保存を博物館ではなく、日常においていつまでも保存したいものだと思った。

巻末、県別に掲載された全国社寺仏閣、神話伝説の伝承地一覧表を見ると、関西圏は別にして、東日本、九州、四国に点在する伝承地は全く知らない所も多く、ぜひとも訪れたい伝承地の多さにおどろいた。

この書はまさに全国の神話伝説の民間伝承地・史跡案内である。学会や余暇の旅行前に、一読すれば旅先の道指南（しるべ）になり、すばらしい旅の思い出となることにちがいない。一読をお薦めするとともに書架に置いていつでも繙けるようにしたい。

(奥沢 康正)

〔勉強出版、東京都千代田区麴町四一八—三六、電話〇三—五二一九〇二一、二〇〇三年一〇月一〇日、A五判、五六〇頁、七八〇〇円〕

太田 安雄 著

『太田雄寧傳』

本書は明治十年に創刊された東京医事新誌の創刊者太田雄

寧の伝記で雄寧の曾孫太田安雄氏（東京医科大学名誉教授、眼科学）の執筆である。著者宅には多くの資料、文献、参考書、写真などが保存されていたが、第二次世界大戦でその多くが焼失してしまった。しかし、肝心の東京医事新誌は創刊号から昭和十五年まで保存されており、残余の資料を収集され、本書の上梓が成った。明治期の医事雑誌を書誌学的に研究する者にとっては、得難い伝記である。

太田雄寧の略歴は、嘉永四年一月十八日武蔵川越の豪農滝島新右衛門長男宗貞の長男として出生、父は文久三年清水徳川家侍医太田昌意の後を継承する。雄寧は元治元年松本良順の蘭学塾に入門する。慶応二年幕府医学所に入門、明治五年軍医寮に出仕、同年十二月私費で米國留学し、ニューヨーク、フィラデルフィアの製薬学校で化学、製薬学を修学する。同七年帰国し愛媛県立医学校長となる。任期満了し東京に帰る。同十年二月二十五日医学専門雑誌「東京医事新誌」を創刊する。同十四年七月十八日ブライト氏腎臓炎で死去、享年三十一歳。

雄寧死去後、雄寧の蘭学の師松本良順が編集局長となって東京医事新誌は廃刊することなく、継続刊行された。本誌は昭和十五年戦時下の雑誌統制により、他誌と併合し、三一九八号より「日本医学及健康保険」に誌名変更し、同一八年「日本医学」に誌名変更、一時休刊となるが、同二十五年より東京医事新誌の復刊となる。同三十五年七十七卷十二月号をもって、編集発行人大島盛一の死去で後継編集人なく遂に廃刊